

文化的社会規範への適応における 自己制御過程についての日中比較

丛 晓 波

中国東北師範大学政法学院

A Cross-cultural study on the difference of self-regulation processes in social adaptation between China and Japan

Xiaobo CONG

- 1) School of Political Science and Law Northeast Normal University China
- 2) Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: The purpose of this thesis is to examine the different influence processes of cultural social norms between Chinese and Japanese self-regulation. Individuals would have different self-regulation and attitude with different social and cultural norms when adapting themselves to the social development. In this thesis, the self-regulation is defined as an individual's attitude or implementation intention to the requirement or expectation of the social norms. There are some culture differences between Chinese college students' and Japanese college students' self-regulation by means of the questionnaire survey with 1148 respondents (students from China and Japan, and Chinese students' parents). There are also some culture and social differences of self-regulation between young and old peoples. It should be noticed about the particularity of Chinese student, the attitude to the family and society, the similarity between Chinese' and Japanese' parents.

Key Words: Cultural social norms, Implementation

intention, Self regulation process, Cross-cultural comparison between China and Japan

第1章 自己制御過程研究における問題点と本研究の目的

自己制御 (self-regulation) 研究は、自己と社会行動との関連を理解する概念を扱うものとして人の行動の多様性についての関心から始まり、これまで、満足の遅延や誘惑への抵抗、または自己指示などの目標への特性的統制行動に主に重点が置かれてきた。特性的自己制御に関する文化間比較研究では、日本人の自己制御が特に強いと言われている。従来の伝統的な見方では、中国人は「勤勉」「礼儀をしっかりと守る」「我慢強い」「分に安んじる」「礼法に従順」「しきたりどおりにやる」などの国民性を持つことが指摘されている。このような国民性は特性的自己制御の効果的結果だと考えることもできる。特性的自己制御ではなく、日中それぞれの文化あるいは社会規範に向けて、自己制御過程に何らかの差異があるのだろうか。現状ではこの問題についての文化間における異同は十

分に検討されてきたとは言い難い。

そもそも、人は社会的あるいは文化的なものである。社会的動物としての個人は、多種多様な集団に属することで、その社会規範に向けて、社会に適応しながら生きている。文化的自己観(cultural view of self)についての理論枠組みによれば、文化が異なれば人々の行動や考え方の根幹となる人間の心の世界もまた異なる。心のプロセスには文化性があるため、それぞれの文化的社会規範に対する選好も文化によって異なるのである。また、個人がどのような行動において自己制御を行おうとするかも異なる。

そのため、自己制御の理想状態あるいは目標とは、個人の独りよがりの思いではなく、独特の文化を反映した文化的社会規範によって日常的に個人に暗黙的に要求される状態であることに注目する必要がある。本研究では自己制御過程を、文化的社会規範が望ましいとする期待に沿って個人が意識的行動を選択する過程として提案する。文化的社会規範から期待された行動を実行することを前提として、文化的社会規範への選好とその実行との関連を通して自己制御過程を検討することが本研究のアプローチである。自己制御過程についての文化間の比較においては、個人の特性的自己制御だけではなく、文化的社会規範を反映した文化的価値観を持つ個人はその文化的社会規範に対して自己制御を行うかどうかということを検討する必要があると考えられる。こうした観点に立ち本研究は自己制御過程における日中文化差異のより包括的な理解を目指した。

同じ相互協調的自己観を持つとされる日中両国においても、異なった歴史的背景、社会経済的体制があるため、文化的社会規範の差異に注目する必要がある。また中国の文化内においても、現代化の進行とともに若者と親世代間の差異が顕著である。このような両国間および中国国内の特徴を踏まえて、日中の文化的社会規範およびそれぞれ文化的社会規範への選好の相違に基づき、選好と実行との関連から自己制御過程の文化の差異を検討することが必要である。本研究では日中の大学生と中国人学生の親を対象とし、自己制御過程の文化差について詳細に調べるための端緒として特

性的自己制御と文化的社会規範を反映する文化的価値観が自己制御過程とどのように関連するかについて日中間で比較する。

第2章 日中両国文化的社会規範における自己制御過程の比較

まず、参加者内において日中両国における文化的社会規範への実行と選好の差異を検討した。日中両国の文化的社会規範により、それぞれその文化的社会規範への選好も異なっていることが示された。また、文化的社会規範に期待された行動への選好と実行との関連について多変量重回帰分析を行った。結果は、日本人大学生が向社会的社会規範に向けて自己制御を行うことを示唆する結果が得られたのに対して、中国人大学生と中国人親が血縁志向的社会規範に向けて自己制御を行うことを示唆する結果は得られなかった。

本研究で最初想定していなかった第3因子として、自己犠牲に関するものが見出された。この自己犠牲的社会規範について興味深い影響過程が認められた。中国人大学生の親世代、すなわち5、60代の人たちの文化的社会規範への振る舞いは血縁志向的行動、自己犠牲的行動への選好からの影響が強かったのである。このことは、この世代の中国人が伝統的価値観と社会変容の双方の影響を受けていることを示唆している。

第3章 特性的自己制御及び文化的価値観が自己制御過程に及ぼす影響の日中比較

特性的自己制御と文化的社会規範への行動の選好からその実行へのプロセスに及ぼす影響、特性的自己制御が文化的社会規範への行動の選好からその実行へのプロセスに及ぼす調整効果、文化的価値観と文化的社会規範への行動の選好からその実行へのプロセスに及ぼす影響、文化的価値観・特性的自己制御と文化的社会規範への行動の選好からその実行へのプロセスに及ぼす影響について検討した。

第3章の各結果から得られたことは、両国の文

化的社会規範にあわせて内在化された文化的価値観は、個人の特性的自己制御と比較すると、文化的社会規範への選好と実行との関連により強い影響を及ぼすということである。なお、両国の文化的社会規範に応じて、個人の特性的自己制御の高・低にかかわらず、日本人でも、中国人でも、文化的社会規範への選好から実行への影響に差は認められなかった。さらに、特性的自己制御にかかわらず、人は個人のあるがままの目標ではなく、文化的社会規範に期待された行動に応じて社会的振舞いを行うことが明らかになった。

第4章 総括と展望

総括として、自己制御過程における日中大学生の差異においては、以下の3点が認められた：(1) 向社会的社会規範における自己制御過程の差異。日本人は自己制御が特に強いとする先行研究と同じ結論であり、「役割社会」と言われる日本では日本人大学生は社会から求められた規範に向けて、ほかの社会規範と比較しても、中国人大学生と比較しても、もっとも向社会的行動に応じて自己制御を行うことが明らかになった。(2) 「家族」と「社会」に対する態度の差異。日本人大学生は日本社会からの役割を果たすため、向社会的社会規範に最も魅力を感じていた。「役割社会」か「血縁社会」の文化的背景の違いを端的に示す結果である。(3) 文化的社会規範に応じた振る舞いの背後にある動機づけの差異。血縁志向的社会規範への振る舞い、向社会的社会規範への振る舞いを行なうことに関して、日本人大学生は特性的自己制御及び文化的価値観から影響を受けていた。特性的自己制御、文化的価値観が強ければ強いほど、日本人大学生は血縁志向的、向社会的社会規範への振る舞いを行っていた。しかし、中国人大学生においては特性的自己制御も文化的価値観も、血縁志向的社会規範、向社会的社会規範への振る舞いを動機づけるものではなかった。日中間だけではなく、中国国内でも、50、60年代の人と若者たちの間においては、文化的社会規範への自己制御過程の差異が示された。若者と比較すると、中国人親たちは「血縁社会」という伝統文化を強く

持ち、自己犠牲的な振る舞いに向けて自己制御を行なっていることが示唆された。

研究結果を別の観点から見ると、3つの興味深い点が指摘できる。第1に、中国人大学生は特殊な群であること。日本人大学生と比較しても中国人親と比較しても、中国人大学生は社会的な振る舞いをするのにただ個人の好みによって決めていることが明らかになった。第2に、日中間における「家族」と「社会」に対する態度の差異。日中大学生間だけではなく、日本人大学生と中国人大学生の親の間でも、家族と社会に対する態度の差異が明確にされた。同じ相互協調的自己観を持つにもかかわらず、日本人にとって社会とは、家族の血縁以外の社会関係を指している可能性がうかがわれる。それに対し、中国人にとって、伝統文化から血縁関係としてのアイデンティティが優勢に期待され、家族のために社会的振る舞いをするのが考えられる。第3に、日本人大学生と中国人大学生の親と似ているということ。東アジア文化圏に属する中国と日本には共通の文化的基盤があることを示唆するものであると同時に、中国社会の急速な変化の影響が大学生世代に文化的背景以上の大きな影響を及ぼしていることを示唆するものである。日中大学生おける差異でも、中国国内の親子の差異でも、それぞれ社会的行動の文化的な背景を反映していることが考えられる。

本研究理論上の意義としては、(1) 文化的社会規範への選好と実行との視点から自己制御過程の文化差を検討したこと。(2) 自己制御過程の社会構成性あるいは自己制御の文化構成性について明らかにしたこと。実践的な観点からは、個人が社会規範の求める行動に向けて自己制御を行えるようにするため、個人の特性的自己制御を高めようとする努力と同時に、社会的行動への自己制御を行う社会環境状況を作ることも重要だろうと考える。

自己制御過程の日中文化差を明確にする以上に、もっと広い範囲で実証されること、より適切な尺度となるよう改善すること、文化的価値観、特性的自己制御以外の、日中両国における自己制御過程に影響を及ぼす規定因に関する検討などが今後の課題である。